







とて。敵地の幫助も馮と。那安西出来介。智勇勝れ者。南弥六判。朝の勇あり。その  
心許み。とらぬの。総而。の日の。廳果。義成。主の。別席。で。二家。光。杉。倉。氏。元  
堀内。貞。躬。東。辰。相。并。有。司。の。甲。乙。と。召。聚。合。て。昨。夜。濱。路。姫。の。危。難。の。伏。姫。神。の。真。助。の  
より。救。ひ。返。さ。せ。ぬ。事。又。那。妖。書。の。支。ま。も。詳。解。示。し。ぬ。を。感。愕。然。と。面。に。注。し。て。或。の。教。馬。の  
或。の。懼。び。囚。牢。司。の。訟。累。を。神。女。伏。姫。の。神。靈。を。女。僧。の。妙。椿。を。越。始。て。曉。得。て。奇。也。と。  
と。む。り。の。嘆。唱。祝。壽。の。聲。耳。も。齊。一。高。武。運。應。驗。の。違。さ。り。と。感。し。る。その。故。に。言。ふ。が。義  
成。羞。る。面。色。也。明。暗。迷。悟。判。然。と。の。期。及。び。て。の。面。を。咄。咄。と。争。何。せ。畢。竟。大。江。親。兵  
衛。と。遠。離。し。ま。り。妖。賊。們。邪。術。を。使。ひ。て。然。る。親。兵。衛。も。房。総。二。國。の。兵。と。盡。し。て。  
伐。り。ぬ。せ。ざ。ん。と。然。し。と。い。又。躬。方。の。士。卒。損。失。も。多。く。思。ふ。ふ。と。始。り。征。伐。緩。ま。り。  
が。素。藤。我。と。侮。り。て。做。さ。る。と。思。ふ。今。千。萬。悔。も。及。ば。ず。速。に。親。兵。衛。を。召。へ。躬。方。の  
利。あ。ら。ぬ。汝。連。の。美。と。何。と。思。ふ。と。問。せ。ぬ。氏。元。の。負。躬。辰。相。兵。侶。の。膝。を。找。り。て。稟。せ。り。御。説

定。不。の。理。の。御。不。故。親。兵。衛。と。遠。離。さ。せ。ぬ。賢。慮。の。程。と。料。難。で。慨。し。思。ひ。し。し。丹。中  
妙。椿。が。反。回。の。幻。術。の。所。以。と。す。方。僅。發。覺。れ。公。私。の。幸。併。伏。姫。神。の。真。助。の。君。が。仁。政。の。應。報。の  
と。し。ぬ。と。い。又。負。躬。の。臣。們。が。愚。意。も。氏。元。と。異。多。く。も。い。大。江。仁。が。啓。り。し。り。且。經。て。往。方。を  
知。る。と。い。心。當。る。外。へ。追。隊。と。蒐。ま。ぬ。又。姫。神。の。真。助。の。よ。り。索。逢。ぶ。べ。し。と。い。辰  
相。も。亦。稟。さ。り。仁。と。召。さ。り。使。使。番。崎。十。二。郎。照。文。と。姥。雪。與。四。郎。を。考。へ。辰。相。十。二。郎。を。親  
兵。衛。が。外。に。相。識。と。し。又。與。四。郎。伏。姫。神。の。引。接。真。助。と。蒙。り。て。六。稔。富。山。の。親。兵。衛。と。守。傳。を  
る。因。り。他。們。が。御。説。と。傳。達。し。説。薦。め。る。親。兵。衛。が。泣。き。て。稟。せ。り。の。事。か。り。ま。わ。り。さ。す。ら。ぬ  
と。い。但。十。二。郎。與。四。郎。も。瀧。田。の。御。城。内。の。一。某。の。使。と。奉。り。馬。と。那。首。へ。衆。走。り。し。辰。相。は。辰  
老。侯。と。い。ふ。事。必。件。の。兩。人。と。遣。さ。し。と。疑。ひ。る。と。正。達。て。各。意。見。を。述。べ。り。義。成  
先。見。ぬ。満。面。の。笑。み。を。見。て。點。頭。多。く。汝。連。が。稟。せ。趣。一。個。と。我。意。を。稱。せ。と。い。の。事。御。不。我  
謬。と。薄。情。や。仁。を。他。御。と。出。遣。し。と。大。人。の。心。を。憂。思。食。不。け。ぬ。と。の。美。の。義。成。瀧。田。の。事。を。い。て

分説と支れれも。然るに今と火急の所要も果索不便六郎と我名代も。多那里赴てり。大  
 人不陪語そまろ。照文と與四郎と俱と速かろ来よ。余の餘のり箇様々々と息状の趣と詞意  
 追く。咄咄の辰相あろ果て然る瀧田まろんを。遠く退出ける。小程の義成主の有り司  
 退かて。多内氏元貞の身邊近く侍り。或は伏姫神の靈驗威徳の大々おろ。稱讚。或  
 南弥六出来介の忠誠義侠と憐て事の吉凶思ひおろ。明日の必殿臺より告り。このおろ  
 専素藤誅伏の計議。旋々。小程の番崎十一郎照文。老侯の仰と稟て。姥堂與四郎共保  
 瀧田より来りける。そのおろ。義成討り且然て大人の仰何ぞ。尊意おろ。意  
 好折く。不來也か。先十二郎。百一を。俵おろ。然る番崎照文の近習おろ。雨  
 室おろ。見参入。然。義成主の照文と。身邊招近着て。先老侯の御安不。向果て却  
 宜。這里も火急の所要おろ。汝と姥堂與四郎。大人借せられ。方僅東六郎。瀧田遣。らけ  
 途。他逢。向て照文。然。路の。錯ひ。辰相逢。義成。頭。その

と。左。右。の。大人。の。仰。何。事。申。承。る。べ。と。眞。の。照。文。躬。膝。と。找。め。御。錠。餘。の。多。少。の。最。憚  
 申。上。君。候。大。江。親。兵。衛。游。麻。步。暇。と。賜。り。と。悔。く。思。召。す。と。ら。れ。義。成。王。整。馬。參。り  
 其。い。ふ。と。知。ら。れ。誰。か。告。す。を。不。思。淺。き。と。仰。照。文。然。れ。の。美。就。て。右。以。あり。老。侯。料。に。御  
 胸。中。と。知。召。す。と。あ。の。れ。仁。と。召。す。使。小。臣。と。與。四。郎。を。相。応。の。多。れ。も。隨。即。の。美。命  
 せ。れ。稻。村。の。一。言。も。ま。ま。の。善。事。へ。急。げ。と。俗。も。い。ろ。照。文。速。來。與。四。郎。と。俱。し。て  
 稻。村。へ。の。我。推。量。不。違。の。用。ひ。ら。美。あ。ん。と。仰。お。ろ。物。ち。申。汗。馬。鞭。と。鳴。り。申。上  
 飛。し。ま。の。不。與。四。郎。の。歩。行。多。老。足。今。番。も。健。老。言。も。後。れ。む。御。父。子。御。同。意。多。る  
 秋。這。里。も。辰。相。と。瀧。田。遣。の。り。事。暗。合。ひ。の。義。成。主。を。討。て。丹。中。亦。奇。し。の  
 多。く。大。人。の。亦。い。ふ。と。我。胸。中。と。白。地。不。然。を。猜。し。ぬ。け。お。ろ。甚。麼。を。と。同。世。の。照。文。答。て  
 然。し。那。船。來。の。鸚。鵡。の。り。君。侯。の。知。召。を。且。始。の。稟。上。今。より。十。稔。前。の。秋。外。國。の  
 商。舶。颯。風。漂。流。し。當。國。洲。崎。の。浦。不。歌。り。折。君。侯。の。仁。恩。不。破。船。と。修。復。ひ。て。去



つひまう 告稟せ 側聞せ 氏元貞仍 俱奇談 駭然 予中 義成主 憶き 額不加 鳴  
 半奇 妙なる 鶴鶴の 奇言 我大人の 御明查 錯ひ 女兄の 君の 神靈の 神謀 不  
 わん 現神通の 力量 義成 民の 童女 化現 賊徒 征伐 緩急 理 示 更  
 又 疾風 躬方 刀槍 見 眞助 施 昨夜 又 明々 地 神體 頭 瀧路 極 僧 妙椿  
 懲 義成 妖賊 惑 論 親兵衛 童羊 似 大  
 予 類 史書 援 世 疑 解 論 廣博 最有 現 今朝 又 瀧田  
 多 鶴鶴 瀧 我 意 衷 大人 告 計 妙 大人 夢 想 入 信  
 と 告 の 疑 朦 朧 現 身 の 鳥 七 大人 疑 快 照 文  
 と 與 四 郎 運 方 遣 事 立 地 合 期 料 這 便 宜 瀧 路 并 妖 書 見 予  
 既 知 召 照 文 們 夢 知 然 今 中 告 要 先 與 四 郎 召 近 習 自 然  
 治 遠 侍 與 四 郎 近 習 別 義 成 主 の 面 前 義 成 運 商

よ 與 四 郎 近 找 我 衛 我 思 浅 大 江 親 兵 衛 遠 離 實 無 此 上 謬 因 召 元  
 と 欲 开 使 仲 十二 郎 と 洩 優 の 瀧 田 辰 相 奇 鶴 鶴 の 忠 告 大  
 人 の 夢 洩 違 這 方 遣 特 便 宜 の 計 忝 思 左 右 十 一 郎 商  
 量 快 起 路 費 野 野 兵 們 伴 當 遺 去 親 兵 衛 の 餘 の 犬 士 亦 素 遇  
 我 意 傳 傳 來 義 成 主 の 親 兵 衛 與 四 郎 額 撞 頭 拾 氏 元 貞  
 貞 仍 對 撰 向 最 惶 御 詭 美 依 介 夫 婦 對 面 穿 柵 回 那 人 往 方 知  
 崎 生 路 那 里 赴 那 山 林 名 迹 依 介 夫 婦 對 面 穿 柵 回 那 人 往 方 知  
 據 御 詭 傳 似 伴 當 一 個 要 况 雜 色 輕 卒 御 内 人 俱 影 護  
 本 意 音 音 俱 不 娛 一 需 要 時 の 暇 賜 道 節 餘 犬 士 們 の 在 外 を

分。素子ゆりやと思ふ折々大江の腋子まゝ仰よりて這地を在るより一人傳ふ事知りし胸淺まき。伴もゆるを怒り執選され老が身の遣る方もきひひの徳る御用を擇んで飛鳥崎生と共侶那八犬の人々の迎ひの仰の趣定まゆる造化の面目の上やひたの身單でいも大江のゆる。犬士連の逢ひ必説薦めて俱さる遠りのつとる男も直示まぞ。氏元貞の有理と感ど。躬て執做され義成茫然とち笑ひて他が情願定お餘さず。親兵と謀て遣さん。ひの非常の與るれも亦不便と思われ強るの要る。隨意さる。却十一郎の甚麼を。あのお就て瀧田を。方仰のまら。あ秋と向せぬ。照文答て然れ目今與四郎が直示せし。小臣。穂北。水垣許。宗由。て。那里。犬士。在るまとい。結城。赴。深。見。君。侯。も。聞。召。さ。る。て。大。法。師。の。宿。願。あり。奉。子。基。公。の。首。ま。り。て。喜。嘉。吉。の。ひ。結。城。を。陣。段。さ。る。人。々。の。並。提。を。吊。か。る。與。春。も。那。地。を。庵。と。締。び。て。大。念。佛。と。修。行。を。豫。さ。る。つ。ま。の。本。月。の。十。六。日。の。那。諸。灵。位。の。亡。日。也。結。願。の。下。り。れ。る。日。小。平。の。犬。士。們。俱。結。城。に。赴。け。り。法。慈。の。會。ひ。凡。非。除。來。會。せ。ざ。も。小。臣。の。御。父。子。の。御。名。代。を。奉。り。十。六。日。の。結。願。の。必。法。會。預。

又。老。侯。の。御。誼。あり。御。布。施。さ。る。儀。の。ご。ま。く。通。与。さ。る。を。ひ。を。柳。宮。の。藏。り。伴。當。持。せ。し。は。又。老。侯。の。宣。ひ。の。始。賢。士。と。招。き。墨。印。の。我。一。署。之。這。回。守。の。殿。の。御。教。書。と。齋。齋。と。仰。れ。て。は。直。示。せ。義。成。點。頭。を。て。寔。に。義。あり。仰。さ。る。我。も。犬。士。們。の。招。状。と。與。へ。く。祖。靈。香。奠。さ。る。ま。は。十六。日。の。結。願。の。餘。日。の。ご。ま。く。十一。郎。の。今。宵。水。引。を。先。武。藏。を。赴。け。下。後。去。向。の。異。と。も。與。四。郎。も。俱。首。途。せ。十一。郎。の。十。個。の。親。兵。の。外。の。東。西。持。を。先。武。藏。に。託。し。下。後。去。向。の。異。と。も。是。等。の。旨。と。有。司。の。傳。へ。事。の。准。備。と。急。ぐ。と。仰。は。大。家。あ。る。果。て。齊。一。退。り。を。さ。る。任。而。照。文。と。與。四。郎。の。御。食。膳。美。酒。を。賜。と。權。且。伴。當。の。揃。ふ。と。當。り。不。幾。程。も。事。の。准。備。整。え。お。け。た。と。隨。即。氏。元。貞。の。招。状。と。香。料。と。照。文。と。通。与。し。け。り。又。與。四。郎。も。親。兵。衛。と。召。か。へ。御。教。書。と。路。費。と。通。与。し。御。誼。と。傳。へ。後。情。願。と。も。獨。り。の。身。單。で。い。も。二。兩。個。の。伴。當。を。領。て。お。け。し。と。諭。さ。る。よ。と。與。四。郎。固。辞。む。と。ゆ。き。瀧。田。より。往。來。の。鞋。奴。只。一。名。俱。と。照。文。と。共。侶。の。稻。村。より。首。途。を。長。江。日。ま。り。影。敬。に。て。下。晡。さ。る。ふ。け。り。今。程。照。文。の。親。兵。十。名。奴。隷。五。名。及。瀧。田。より。俱。し。と。私。の。

八代傳九郎卷二十一  
廿三  
文政五年



ともひと。ともをたのまら。むさ。い。よ。ら。う。ゆる。とも。びんぎ。み。と。お。わ。む。その。よ。う。の。せん。と。り。の。り。  
 伴當と共に二十餘名の従者と領て與四郎と共侶の便宜の港口に赴き。當晩海船に執業。武  
 藏の千住と投て走れ。與四郎は纒一個の伴當を後へて別船より乗。下總より市河  
 とて。通。げ。た。水。の。り。を。た。り。信。り。一。程。の。辰。相。の。瀧。田。より。か。り。來。て。義。成。主。は。信。々。と。返。命。を。上。上。の。  
 既。の。鷄。鷓。の。奇。談。也。這。方。の。事。を。那。里。の。知。れ。ぬ。照。文。と。與。四。郎。と。遣。さ。れ。後。を。れ。又。さ。を。居。  
 る。も。る。一。れ。も。君。侯。の。死。術。を。み。が。う。も。悟。り。ぬ。て。親。兵。衛。を。か。ま。せ。ぬ。か。一。條。の。老。侯。の。御。本。意。を。稱。せ。  
 變。の。飲。び。ぬ。大。々。々。を。因。て。南。弥。六。出。來。介。任。使。義。烈。の。支。の。趣。鷄。鷓。の。告。も。漏。せ。ぬ。と。云。云。と。す。ま。の。け。  
 老。侯。御。感。法。を。ま。譜。第。恩。願。の。者。を。與。他。們。守。の。與。命。を。惜。ま。義。勇。を。併。守。の。殿。の。  
 士。と。愛。一。民。と。拊。勞。に。慈。の。致。主。所。を。死。飲。び。ぬ。と。告。京。志。一。か。義。成。も。亦。飲。び。ぬ。公。子。賢。明。の。死。  
 相。譚。と。傳。々。の。稱。讚。と。咸。憑。く。思。ひ。け。信。而。の。次。の。目。の。黃。昏。時。候。の。殿。喜。雲。陣。中。より。荒。川。  
 清。澄。が。使。者。と。して。詰。茂。佳。橋。の。一。騎。稻。村。の。城。の。着。到。と。荒。磯。南。弥。六。安。西。出。來。介。素。藤。之。刺。  
 ん。と。敵。城。へ。入。て。戰。歿。の。事。の。顛。末。且。南。弥。六。怨。魂。の。首。級。を。任。り。て。鳥。首。及。れ。り。一。是。故。の。

館山の牢獄司が贖首と鳥一。清澄の事を知らず。急ぎ士卒を遣て。出來介が首級を奪捕  
 せ且敵の雜兵一名を生拘りて。度の仔細を責問ひ。南弥六出來介が勇戦を為。具。小。少。素。藤。之。刺。  
 屍。を。肩。に。載。せ。れ。士。卒。數。を。亦。那。牢。獄。司。に。南。弥。六。の。贖。首。用。ひ。南。弥。六。を。敵。殺。せ。賊。徒。名。幕。沙。  
 雁太の首級をせり。一。笑。か。堪。が。り。の。然。れ。出。來。介。送。書。を。て。志。の。程。も。知。れ。忠。義。分。明。ひ。首。  
 級。の。近。山。院。に。葬。り。て。異。日。墓。表。を。建。た。す。満。呂。復。五。郎。以。下。の。刀。瘡。見。の。久。く。瘡。癒。る。者。五。六。  
 名。の。一。將。息。の。與。大。城。内。に。か。一。置。ま。く。欲。ま。す。皆。獲。輜。不。兼。せ。れ。明。日。來。着。付。ん。先。件。の。趣。を。受。  
 え。あ。ひ。ま。る。ん。為。馬。と。走。り。い。ひ。を。清。澄。高。宗。逸。友。們。連。署。の。旨。を。書。き。あ。せ。け。れ。有。司。に。れ。受。  
 きて。三。家。老。お。告。知。せ。當。晩。披。露。を。及。び。け。信。而。の。次。の。日。復。五。郎。と。首。と。て。刀。瘡。見。も。來。れ。各。  
 宿。所。か。へ。居。り。て。醫。師。の。命。で。茶。を。賜。り。又。滿。呂。復。五。郎。は。南。弥。六。出。來。介。の。見。子。を。死。飲。者。と。居。り。  
 親。族。の。あ。も。と。問。せ。た。ま。ふ。南。弥。六。を。妻。も。多。子。も。あ。り。獨。阿。弥。七。と。喚。做。ま。南。弥。六。が。弟。中。に。上。總。  
 なる。蘇。々。利。の。農。屋。へ。件。の。阿。弥。七。を。兩。個。の。見。子。の。家。子。と。阿。弥。太。郎。次。と。増。松。と。喚。做。ま。俱。小。尚。





轉其親の名の房へとる名詮自性と思ふ事不嫁一も束弓春の過ける花の根の我の舊巢へかかれも  
返る親の昔の裁の友もあつた心の憂ひ帝に難く塵の交る塵の世や對死の果一も然る在るべ  
深のゆれか又依介を先立と香華院へ參詣五七町の程ゆく寺の事ゆけれ祖先の墓の花を  
向て方丈の封の名簿と玉一布施せよまれば任持躬て對面して十念を授け布施の言依りてる心  
茶を呼ぶ菓子も鷹を似ける俗談せよ親兵衛の困り果て依介を目を注ぐやろく辭去て大江屋  
へから来りければ水濤の準備の酒館と羞めて良人と共侶の曾待初め増け亦程這市河の里人們を  
幾の程あつた知り凡大八の真平が神願の遇ひも既六稔の光陰と塵でいふ日還る今茲九歳の  
童の身長猛可大なるも文学武藝のいづれも萬事成就神童と稱され權且安房の  
稻村の在り親の上境と見為すべからしと語續絶いといゆる陝田舎のりあれ一御  
を知らるる次目の朝も四五名連署する鐙を贈り海鮮を贈り或果子煎茶を贈るも  
是で良賤先弱陸續と感大江屋詰来り終つて演對面を請者幾百人も知る中少小文才あ

雨見の伊呂波韻と撮毛煉まで幾遍と線返り辛を並立五七言の平仄を整ふる詩良良様  
との悪筆とて可惜唐紙紙寫り母と懐中來寄るあり又それらも介遠波の知所調吟の  
よまきよの像易と雅言俗語の駁雜多三十字と着せ美觀の高檀念筆勢折る釘の像  
を傲然と遺るありけは是より親兵衛の依介と商量の餅十五斛搗煉と一御送る餽遣  
ま又東西贈られる酬答その人々を宿所招て置酒して一日遊用且大江屋の船工も折酒を  
飲けり修雜費の親兵衛が携る盤纏と以て刺主人依介の金五両を取せ依介數費推返す  
云とと推辞めも親兵衛の理と盡す萬も水濤の遠與け介程親兵衛の舊里人の愛顧せ  
られて逗留數日及び猛可依介別を告て先徳の方へ去ると欲せ依介水濤を推想す  
也放ち遣るもあつた親兵衛徐論と錦を被て故郷還るは是れ人の面目も我身正  
ち里見殿は重任大祿の采とてか来りあはれ只是れ孤客も同因果も義兄弟七太の在処を  
索とある君の仰と示るは舊里とて浮世を這て這地方の日と弘ぶをも忠る義も依介も





八傳九拜...

九八

大...



八傳九拜...

大...

鯉佐太郎孝嗣と喚做る竹歳計の後生と豫より風聲あり那人の多々權佐守如主の奥家老て  
 上程鮮目御前の御意とて新参る侍人龍山縁連と數んも大坂毛野胤智と喚做る智勇  
 勝れ後生と憑り那縁連大坂の親の冤家とありけれ商議即座を整理して春正月某の日縁  
 連并河黨の甲乙相摸る北條家へ和議の使を赴け折鈴茂林の頭也大坂を俟着て縁連主  
 僕と副使を鯉崎猛虎們を數を捕すとの餘越杉駱三一峯電鍋介既済と喚做る奸當主  
 僕の悄悄地も毛野の助劍を大田大川とせまる勇方と為敵をれけりとの事とすも五十子の城  
 内におもひの管領酷く怒せしめてみづも毛野と追捕の為隊兵三百餘名をわく其舊地におも  
 り鈴茂林の浦邊の煉馬の殘黨大山道節忠與と猛者同盟の義兄弟大飼大村の  
 西勇士と二隊まされ埋伏をその隊の猛卒七八名猛可起りて前後より挾きて攻敵を大刀  
 風當るづもあつづの管領方の乱謀とて數々者討つて大將の辛あつて四個の近目と俱に  
 敵の田を投脱て五十子と投て走りの道を節透さげ趕蒐て克奪て数日前の管領様頭と射

られて頭鎧の矢場も落れも幸ひなく裏の缺も這里と後兵四名の内兩個の道節即敵を  
 けり小程五十子の城内におもひの管領とて上様驚れ數々せめて救急縁連と除んとせり  
 故に毛野より事と洩して那道節は告るん然れども思ひはる剛敵途に起りて館を危  
 窮及せの始と推考も吹て倒れぬと求むる我愆と争何れも君をれをせ支るる及赤心と  
 後より知らせまらるる自刃と亡のいとそ然れ河鯉權佐守如主の神多と自身之事仔細を  
 知るよりまれば毛野と怒も腹撞断る臨終に獨子ける佐太郎孝嗣不送言し君の先途とんをりて  
 極ひまらるる克己の館の奴馬前も戦殺すと勵む折る大山們を義兄弟大塚信乃の詭計と  
 ても隊兵總が二十名と俱しく城内におもひの放りて攻られ城の果敢るく陥されて城兵も數れ  
 けり徳平程と管領様の又高畷の頭也大飼大村西勇士最も稠く追逼られて近兵皆數れ  
 残る大將のまれば馬と圍の邊馳寄せて腹を断るる程小件の河鯉孝嗣主が各亡散と轎子  
 昇りて走りまらるる三千名許の主卒とて主君の危窮と極ひまらるる隊兵を分て忍國の城と築ま

其身の些少残兵に従て小川と隔て敵を俟らば必死の覚期を以て大飼大村両雄の感なく左右を  
敵も蒐らば折る道節も首を大坂大川大田們に料らば遠果取合らば折毛野道節  
と現八大角の四大士。初對面の口誼も孝嗣を憐れ原來毛野道節の始より謀し合を館を  
狙撃しあはせし心猜し解て毛野を恨まざるべし。却己死すべし。名告被け敵を招はく  
勝負を決せしを勇し道節們の感嘆して敵亦又交を毛野共侶を對して問答數回及びは  
道節の分捕る馬を孝嗣返さる。孝嗣馳てら踏て一箭射て相別れる。その折の進止寒愛臣  
武者態より敵を大士達只願感て己が死を知れる者。誌徳而河鯉孝嗣去忍岡の城を  
て王君を見参りし。解目御前の身如も自殺せし趣を又毛野道節と謀し合を君侯を  
犯さる。折る故の箇様々々と對陣の折洩ゆる。毛野道節初對面の口誼も事の證とて  
上様の死行を事由と稟し解を辨論詳る。管領昨非悟をあり。御後悔大なるを。其  
詰朝孝嗣去五十子入赴死。昨日大山が濱邊果る。王君の身鎧も命。馳て五十子の城を

入て敵の退たふより。躬方の残兵を四門を守り却忍岡の城より来て頭鎧返なり。且五十子  
体及信乃道節が白壁書を送る。文言と依々とち誦して。恥辱の縁連を君を責ま欲り。若  
邪智奸侮も起る。解諦稟も管領の之恥を以て。孝嗣の忠孝を賞めて。洩る。人の本  
領を賜て。身邊近き使れ。功と媚と榮と羨む。侮人け。折觸り。諛言と。その非の者。多かり  
けれ。管領亦復感されて。然も二代の忠臣。情地を疑ひ。遂外様退けて。五十子の城。あはせ。そ  
ら。忍岡の城内。聖界も。孝嗣の群小の諂と。怖る。為。病病。假托。出仕。其。無意。の。存。け。は。人  
們の尚飽を。中央縁連と親かり。も。折る。龍山の與。怨復。思。心の起。り。は。と。怕  
る。免偽書を。為。河鯉佐太郎。孝嗣。毛野道節。内。心。七。忍岡。五十子。の。兩。城。を。攻。め。せ。ん。と。欲。す。  
密謀。恣。心。と。件。の。偽。書。を。披。露。せ。し。管。領。激。怒。り。あ。り。有。司。命。と。孝。嗣。捕。捕。獄。會。殺。罪。  
然。も。毛。野。道。節。們。が。在。外。に。向。て。呵。責。駁。わ。け。れ。も。素。より。冤。枉。の。罪。を。招。き。て。死。す。る。一。を。を  
り。忍。岡。守。城。の。頭。人。根。角。谷。中。二。麗。廉。奉。り。て。日。毎。拷。問。に。加。る。程。も。五。十。子。の。城。内。も。美。田。取



蘭二元栗專作出役。然しれども孝嗣主の毫も屈せざ死を極めて。冤枉のよと叫ぶの。力あり  
 以ともる。谷中二駝蘭二相計ひて。那人の首伏の條を。哄造る。毛野道郎の孝嗣。捕  
 捕られし。知て。深く。驟れ。今。照驗。ゆ。巧。の。孝嗣。主。の。死  
 刑。不。處。れ。今日。未。下。刻。前。面。岡。牽。出。され。首。と。刻。り。と。ゆ。え。す。が。実。檢。使。を。根。角。生。大。刀  
 令。あ。の。元。栗。生。が。五。十。子。より。出。役。を。逆。件。の。風。聲。あり。方。僅。衆。人。の。物。見。んと。走。り。あ。れ。外。を  
 ぞ。今。好。人。の。敷。も。と。憐。れ。せ。樂。ひ。の。薄。情。り。ける。人心。益。る。所。為。で。は。る。と。い。う。外。面。瞻  
 仰。て。長。日。を。く。は。も。と。未。の。中。刻。ま。り。ま。り。噫。鈍。ま。や。長。物。語。耳。咻。く。思。れ。け。茶。金。沸。湯  
 又。一。碗。ま。の。せん。飲。と。茶。碗。を。合。て。吸。ま。せ。と。親。兵。衛。の。遠。く。呼。禁。め。て。不。吉。な。り。茶。の  
 欲。か。も。現。阿。懐。の。物。り。中。我。疑。以。釋。け。れ。忠。臣。孝。子。の。誣。ら。れ。て。罪。る。ぬ。罪。身。と。殺。せ。り  
 宿。世。心。麻。る。心。報。を。悠。々。の。不。平。の。事。を。切。て。其。里。へ。赴。は。て。外。を。く。その。人。の。面。影。を。く。り。も  
 不。ま。く。不。向。岡。の。那。里。を。と。向。へ。答。す。件。の。岡。不。忍。の。池。の。畔。と。左。五。六。町。の。前。面。連。り。

岡の。這。里。と。距。る。と。遠。く。七。八。町。の。や。ゆ。ん。か。と。を。親。兵。衛。は。あ。ま。原。來。同。名。異。地。を。一。我。等  
 武。藏。の。向。岡。即。故。名。所。を。開。國。府。の。南。の。方。玉。川。を。隔。る。數。里。連。れる。岡。と。向。岡。と。喚  
 做。され。然。し。萬。葉。集。の。柿。本。朝。臣。人。磨。の。歌。出。る。向。の。岡。の。本。飯。茶。所。花。の。成。ら。む。止。り  
 志。と。よ。も。る。も。又。新。勅。撰。集。小。野。小。町。の。歌。武。藏。野。の。向。の。岡。の。草。を。根。と。ら。ひ。も。根。と。と。を  
 思。ふ。と。詠。る。も。俱。不。忍。岡。の。向。の。中。を。素。よ。是。國。府。の。近。の。岡。を。先。哲。の。考。證。あり。然。し。又。這  
 頭。中。も。同。名。の。岡。あり。い。知。る。土。人。の。私。稱。を。と。詰。れ。老。媪。の。點。頭。で。宣。す。い。定。以。以。向  
 岡。の。這。頭。あり。ね。と。忍。岡。を。喚。更。前。面。岡。と。よ。者。あり。又。不。忍。の。池。の。西。の。本。御。續。る。岡。を。前。面  
 岡。と。喚。做。ま。土。俗。の。私。稱。を。取。る。の。足。ら。ぬ。を。喚。ま。れ。る。久。く。り。ぬ。今。外。を。改。め。を。り  
 御。入。り。の。御。後。世。の。當。世。の。當。世。の。俗。稱。を。因。て。俗。稱。の。儘。先。の。尋。日。勿。て。便。利。小。の。り。と。い  
 は。吻。々。と。う。ち。笑。へ。親。兵。衛。も。う。ち。合。笑。て。現。り。れ。ば。その。理。あり。然。し。酒。家。も。前。面。岡。快。約。と。と  
 腰。纏。より。錢。と。出。り。茶。價。と。遠。く。昔。笠。合。て。遠。く。茶。店。と。出。り。程。小。肚。裏。思。ひ。

奇那老媪が物のりま。民間微賤の者も似せ甚麻る人の果や見是ま心憎ふ河鯉親  
 子のりも我身富山有り一時伏姫神の告まひて最詳か夢知る今又老媪説く所這  
 那符節と合き像く言具く二重も漏れ他いふ城内の機密を探らば故るは  
 亦奇きそち左まれ右もあれ那孝嗣の身は是忠孝の士道節毛野們も相憐れ  
 とも是然か今我身單中て極小由るのり切て首級と奪奪合て便り宜言佛場葬  
 是武士の好意徒や已んと尋思と多足と早めて打出の前面固未だそれ既刑罰の折と  
 かかくて年二十許る後生の面白く月額の迹伸て黒髪が背に結紐られて布皮の上より此是  
 孝嗣をん又実檢使と見え武士の紺純子の息は天鷲絨の下縁の野袴に朋葱羅紗の戰  
 外套とち披りて朱鞆の両力苛めく發見尻に撰る根角谷中二麗麻るべし又年齡二十有  
 餘る一個の武士の袴の半分隠るまで高股裁と合も葱白の太は緋紐の袴の質と頭して  
 殺柄破ま一口の刀と見ると拔持は罪人の後方跪坐るある那兜果專作あるは它雜兵數十

名或は桿棒と衝鳴くと現んと近く衆人と追拂ひ或は鎗鋏又と推立持て整存と守  
 護もあまの事の為体五身官餓鬼と屠り夷狄の庖厨と豚兒と鮮も恁やあんと思  
 なるも凄くも亦嚴る後の高岡岡と招くも同道芒草の劍の山嶽と疑れ前不忍の池や  
 紅蓮の芙蓉の葉も正是人間榮枯泰一炊子息絶れ萬哀休と仰せ究つて自天答と  
 幽鬼今夜誰が家も落ん信哀れを知り親今孝嗣が數と現んと聚合し里人趕散さ  
 れて又取引板の鳴子も群雀囀りあま樹に登りて遠く觀るも程親無衛  
 岡の邊ふと敏光橋蔭と便り近く人不知れも剛親も登時根角谷云孝嗣あり對ひ  
 河鯉佐太郎兼れ若父權佑守如常家恩顧の老黨も多煉馬の殘黨木山道節并大  
 阪毛野們も通同と出頭並の良臣龍山免太夫縁連們を狙撃して北條家の和議も破り  
 君侯と危く五十子の大城大塚信乃と引合折守如奸詐密謀も發覺れんとせし怖と  
 那身の自滅してけり子孝嗣偽り七忠死のよも票做して君と恣となり更又毛野道節們

折々密書をかへり。五十子忍岡の両城を攻めんと相謀る。虎狼の野心大辟不赦九族越え敷く。盡して誅せらるる者も母の星表も世を去りて兄弟姉妹もあつたが先祖の忠勤を思食て罪一免とめ。人ふ止れ目今斬首せらるる者也御誑辱く養育して又受よとの渡も考嗣所々嘆嘆。現衆日の金と鏢と忠義と誣て謀叛らひ奸佞と稱て良臣との秋緑不黄裳安賤の乱冠履を異ふして天地反覆と然らば位子昏誅せられて。兵王亡びに去る去て大夫種罪と云ふの期及びて何をのん屍野荊を肥をも冤冤必天雷とて誑臣を撃殺え思ひ知るのとこの果は谷中二怒れる聲めり立て。誰の言誰の言誰の言誰の言疾々首を刎と劇に指揮の元栗專作養りぬと身を起して考嗣の項の後毛を両三遍拊揚る。念佛せんと聲をて夏冬寒く水做去。又と暑くと振抗る程もあつた一個の武士曾野袴刀不草輕淺紫の三尺帯の締目長に逆旅の打拵湯嶋の方より忽然と飛ぶ似く小走り多間近くる。隨ふ越後方言の聲高きや。管領家の人々も酒家の腹大刀自の現伴當栗鷹駿平の深と喚做き者老夫人の御意とて。修不音ひも一重時及と

止まらぬ扇と抗々喚うけす。思ひをらるるれ故駕に託る谷中二專作庖丁去河鯉の頭を敷く。投頭の思念不暇るるけり。既なり栗鷹駿平の走着る谷中二軀を棄見を放て遠く立迎へて御邊へ越の老夫人の現伴當栗鷹駿平在下則扇谷殿の御内を忍岡の城守護の頭人管領家の御誑より。逆臣河鯉佐太郎考嗣を刑罰の爲出役する。根自谷中二鹿鹿で越の老夫人何の故か。通々の御参向逆の御沙汰も。桃と御旅の。駿平も御不審是の理の。老體朱の婦人とて。依狂可る御旅行の所以。老夫人見参の折疑ひ鮮と。詞の記らば徐と。老夫人の先伴。是甚摩多打扮を但見る。第一番の排列の鐵炮弓多四十名。次長尾の家の花號の緋の油簾。小縫治。一對の挾箱。次小程々緋の重鞆。拭る眉火刀を持る者。次小歩兵二十名。却る次夫人の轎子。左右の従。老黨若黨齊々と二十許名。日行装束。陣笠野袴掩膊脛衣列正と守護する。次の雜色數十名。醫師の轎子茶辦當伴の女房の轎子。十挺ある。是より下。騎馬の老黨伴鎗陪伴雨衣。鹿の角通ふ。と









孝の  
 不  
 忍  
 の  
 池  
 の  
 畔  
 小  
 孝  
 嗣  
 親  
 兵  
 衛  
 と  
 戦  
 ふ

南總里見八犬傳第九輯卷之十二分卷下終

八犬傳九輯卷十二下

北八

文政堂藏



八犬傳九輯卷十二下

文政堂藏







